

6-1

「読解力」向上の視点から 「学力向上の取り組み」を見直す

大阪教育大学教授 木原 俊行

はじめに

筆者らは、第1章にて言及したように、「読解力」をある種の合成学力として理解している。すなわち、教科学力(関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解)、学びの基礎力(豊かな基礎体験、学びに向かう力、自ら学ぶ力、学びを律する力)、そして社会的実践力(問題解決力、社会参画力、豊かな心、自己成長力)という、3種類の学力の連関によって生ずる学力として定義している。

それでは、この「読解力」は、前述した3つの学力といかなる関係を築いているのだろうか。筆者らは、学力は総合性を帯びたものであると考えている。それゆえ、「読解力」と他の学力の関連にも、様々な関係性が想定されよう。そこで、本稿では、「読解力」と他の学力がどのように関連しているか、その典型的なパターンの導出を試みる。

次いで、代表的な学力パターンを生み出す教育力について考察する。「読解力」の高低は、どのような教育力によって規定されているのか。各学力パターンに特徴的な教育力のパターンを導出して、両者の連関に迫る。

そして最後に、「読解力」の向上を目指して、教育力をどのように発展させればよいかについて、そのモデルを提案したいと考える。

1 「読解力」と他の学力との関連パターン

筆者らは、「基本調査2006」の受検校ごとに、「読解力」、教科学力、学びの基礎力、そして社会的実践力のそれぞれについて、子どもの得点をまとめ、それを偏差値に換算した。次いで、「読解力」を主柱に据えて学力パターンを整理するために、まず、各学校を、「読解力」の得点が1)高い、2)平均的、3)低いという、3群に分類した。

この3群のそれぞれについて、他の学力がどのような状態になっている場合が多いかを調べてみると、次のような5つの代表パターン(理想型、学術型、平均型、実践型、不振型)を導出できた(図表6-1-1)。これらのパターンの特徴を解説しておこう(図表6-1-2~図表6-1-8)。

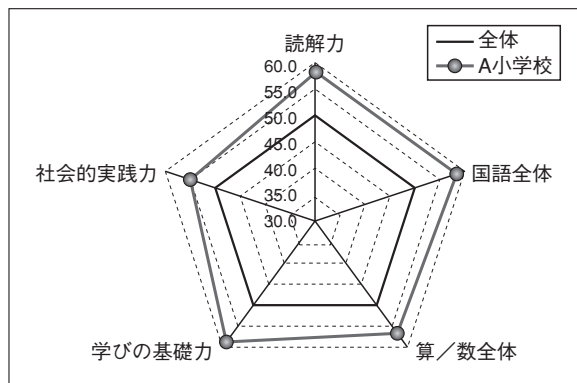
図表6-1-1 「読解力」と他の学力の関連パターン

読解力	教科学力	学びの基礎力	社会的実践力	学力パターン
高	高	高	高	理想型
	高	中	中	学術型
中	中	中	中	平均型
低	低	高	高	実践型
	低	低	低	不振型

(1) 理想型

「読解力」を含む、あらゆる学力が平均値を大きく越えている学校である。「読解力」が、教科学力、学びの基礎力、そして社会的実践力の高さに裏打ちされ、保障されている最も理想的な学力パターンである。レーダーチャートの形が、「読解力」、教科学力(国語)、教科学力(算数・数学)、学びの基礎力、社会的実践力を頂点とする正五角形に近い。小中学校ともに、このような学校の存在が確認された。図表6-1-2は、大都市に位置する、A小学校の学力実態である。

図表6-1-2 理想型の学力パターン(A小学校)

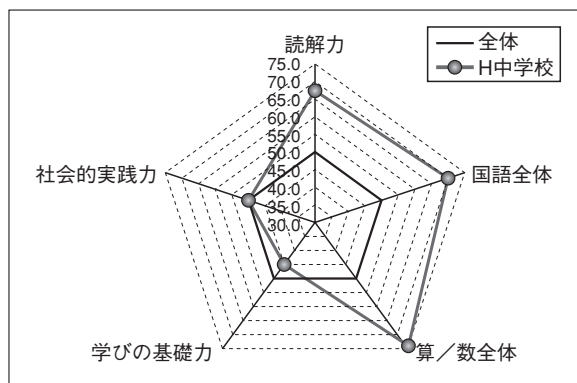


(2) 学術型

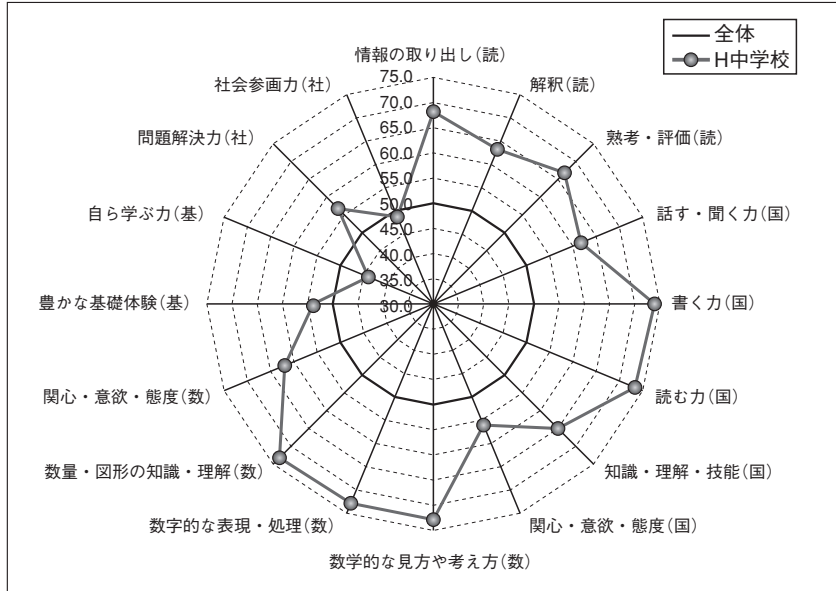
この学力パターンの学校の場合、子どもの「読解力」得点は、理想型と同じく、高い。また、教科学力(国語、算数・数学)も、理想型に比べて遜色がないほど高い。

ところが、学びの基礎力や社会的実践力の得点は、それほどでもない。H中学校の学力実態を表した図表6-1-3をご覧ください。この学校の子どもは、「読解力」・教科学力は極めて高い得点を獲得しているが、彼らの学びの基礎力や社会的実践力の得点は、むしろ、平均以下の値を示している。図表6-1-4は、この学校の学力実態を、観点別にさらに詳しく表したものである。国語や算数/数学の関心・意欲・態度は、他の観点に比べて、それほど高い結果を残しているわけではない。このこともあわせて、この学校の学力は、「学術的」色彩が濃いと言える。

図表6-1-3 学術型の学力パターン(H中学校)



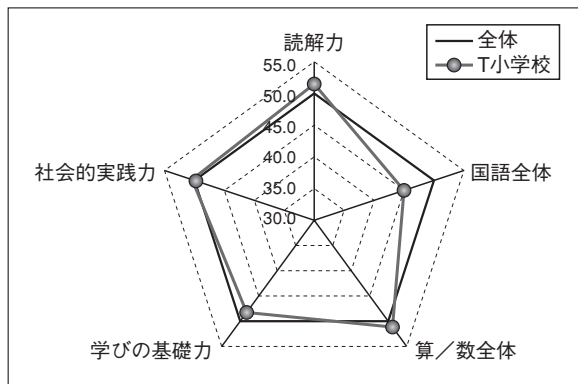
図表6-1-4 学術型の学力パターンの詳細(H中学校)



(3) 平均型

「読解力」を含むあらゆる学力が、平均的な値を示している学力パターンである。学力実態に大きな問題がないとも言えるが、学力向上のアプローチにおいて、学校としての特色に欠けるとも言える。図表6-1-5は、T小学校の学力実態を示している。多少、国語の学力に問題があるが、基本的には、学力のレーダーチャートが正五角形に近い形となっている。ただし、それは、当然のことながら、理想型よりも小さい。

図表6-1-5 平均型の学力パターン(T小学校)

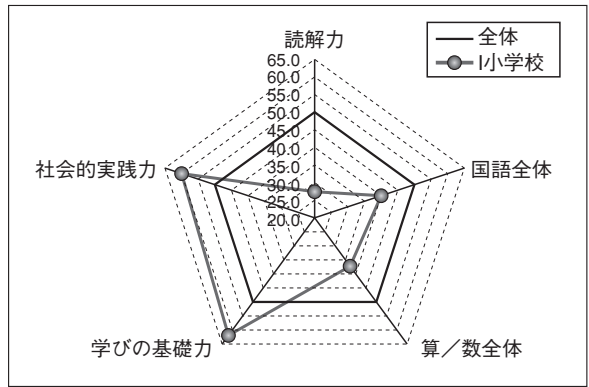


(4) 実践型

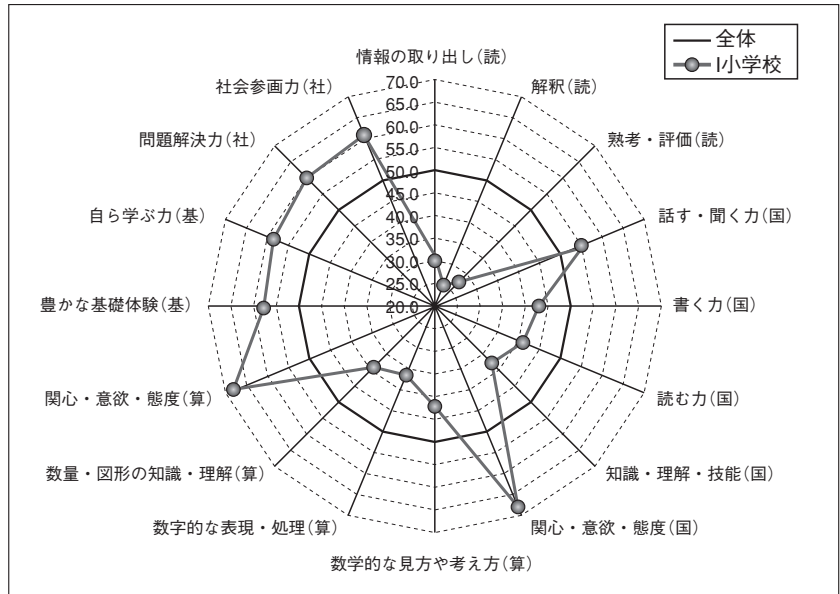
「読解力」得点が低い。また、国語及び算数／数学の教科学力得点も低い。一方、学びの基礎力や社会的実践力の得点は、高い。学力のレーダーチャートに、ひずみが生じている。

図表6-1-6は、I小学校の学力実態を表現したものである。明らかに、「読解力」及び教科学力(国語、算数／数学)の得点が低い。それなのに、学びの基礎力と社会的実践力の得点については、偏差値が60を越えている。先の学術型の学力パターンと対照的である。それは、教科学力の観点別の得点を確認すると、いっそう明らかになる。図表6-1-7では、この小学校の子どもの教科学力は、多くの観点において平均値よりも低いのに、関心・意欲・態度に関するものだけが、それを越えている。

図表6-1-6 実践型の学力パターン(I小学校)



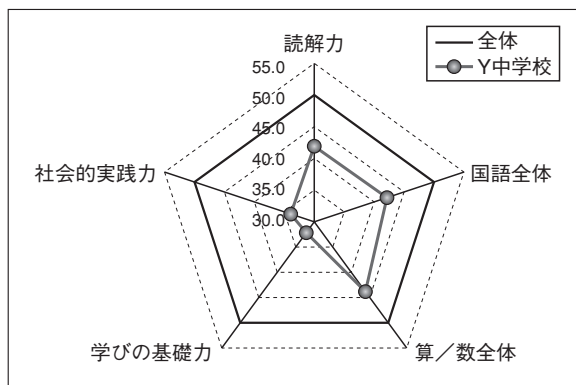
図表6-1-7 実践型の学力パターンの詳細(I小学校)



(5) 不振型

図表6-1-8に明らかなように、「読解力」を含めて、あらゆる学力の得点が低く、学力向上の取り組みについて、極めて緊急性の高い学校の学力実態である。

図表6-1-8 不振型の学力パターン(Y中学校)



2 学力と教育力の連関—「読解力」とそれを育む指導を中心に—

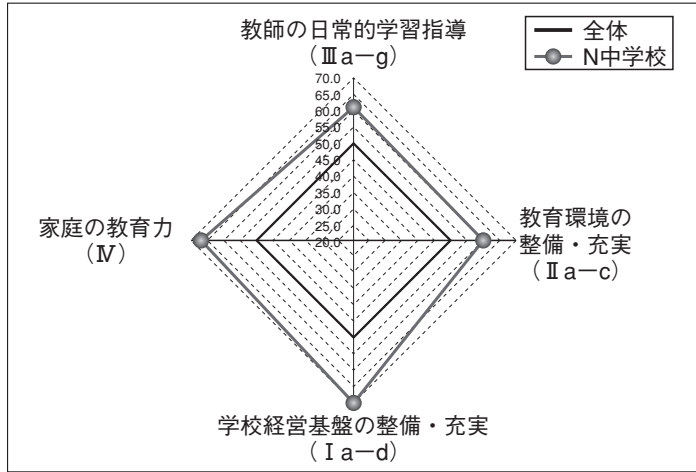
前述したように、「読解力」の高低を基本視座に据え、さらにそれと他の学力の関係をもとに検討してみると、総合学力には、代表的な5つのパターンが存在することが明らかになった。こうした学力実態は、どのような指導、学校経営、家庭における働きかけによってもたらされているのであろうか。5つの学力パターンを示す学校の教育力を、第2章1節図表2-1-6「読解力向上に関する取り組みの構造モデル」を踏まえて分析してみた。すなわち、「教師の日常的学習指導」(各教科での多彩な情報活用の取り組み、問題意識や意欲の喚起、学び合う集団の形成、基本スキル指導と演習、適切な課題・教材の開発、モニタリングスキルの育成、読解活動へと誘う強化因子の付与)、「教育環境の整備・充実」(豊かな素材に触れる環境の整備・充実、「読解力」指導を支える豊かな教育カリキュラムの整備・充実、実社会への適用の場や機会の設定)、「読解力向上を支える学校基盤のマネジメント」(基本方針の設定と共通理解の推進、教育資源・環境の有効利用、教育課程の整備・充実、推進組織・協力体制の充実)、そして家庭における豊かな働きかけ(しつけ、家庭での交流・支援、学びへの参画)についても、教員・学校長・保護者を対象とする「総合教育力調査」から学校別の得点を算出し、それを偏差値に換算して、レーダーチャートに表した。それにより、「読解力」を育むために必要とされる教育力の実態についても、パターン化を試みた。

5つの学力パターンのうち、代表的な教育力パターンを導出することができたのは、「実践型」を除く、4つのものであった。それぞれについて、その教育力の特徴を以下に解説してみよう。

(1) 「読解力」高位の学校に見られる教育力パターン：充実型と特長型

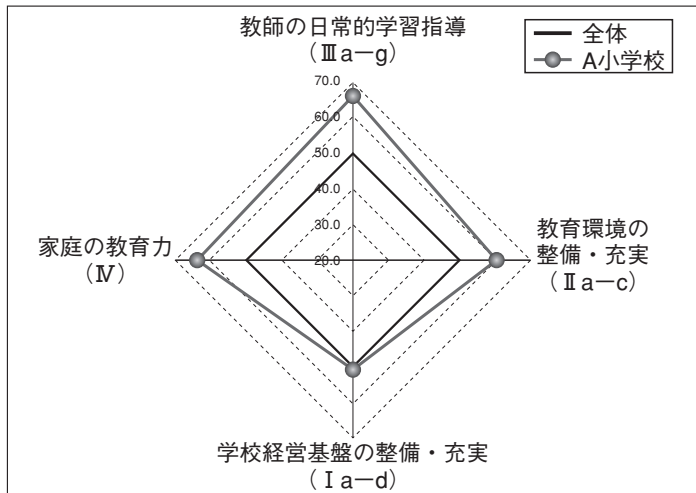
予想に難くないが、理想型の学力実態を示す学校の教育力パターンは、教師の日常的学習指導、教育環境の整備・充実、「読解力」向上を支える学校基盤のマネジメント（以下、学校経営基盤の整備・充実）、そして家庭における豊かな働きかけ（以下、家庭の教育力）が平均値を上回り、教育力のバランスが保たれている。これを「充実型」教育力と呼ぼう。図表6-1-9は、その代表例である。「読解力」の向上を目指す学校の教育力のモデルパターンである。

図表6-1-9 充実型の教育力パターン(N中学校)



ただし、理想的学力パターンを示す学校のすべてが、このような教育力実態を示しているわけではない。これに「準ずる」場合も少なくない。図表6-1-10をご覧ください。これは、理想型の学力パターンを誇っているA小学校の教育力に関するレーダーチャートである。

図6-1-10 充実型の教育力パターン(A小学校)



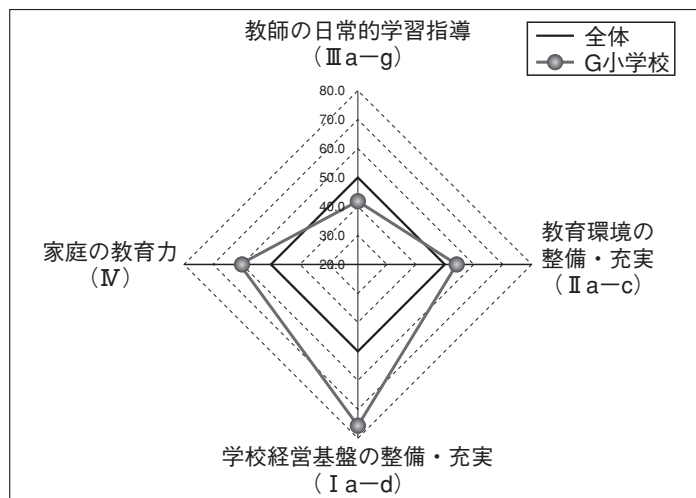
「読解力」向上に向けた、教育力の充実は極めて難しいのであろう。その4側面（教師の日常的指導、教育環境の整備・充実、学校経営基盤の整備・充実、家庭の教育力）のうち、3側面程度が平均以上であれば、子どもの「読解力」向上が実現するという

ことが明らかになった。

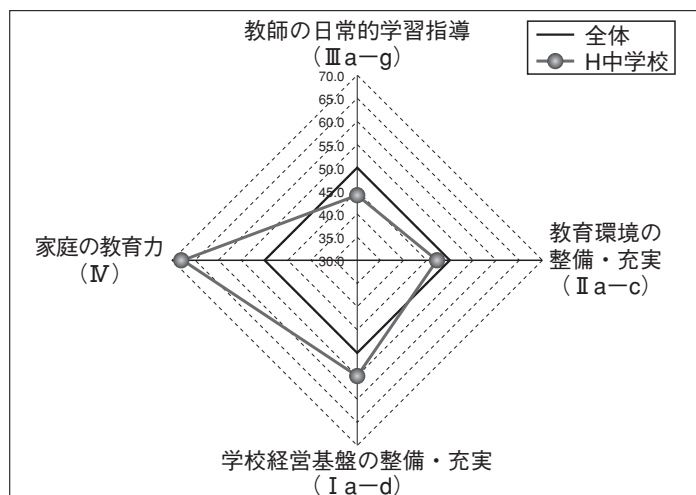
さらに、同じ「読解力」が高い場合でも、学びの基礎力や社会的実践力がそれほどでもない場合、すなわち学術的学力パターンの場合には、理想型学力に固有の充実型教育力とは異なる教育力の存在を確認する。それは、特長型とも呼べるものである。図表6-1-11、図表6-1-12をご覧ください。これらはいずれも、学術型学力パターンを示す学校の教育力を表したものである。教育力の4つの側面のうち、特定のものが高い得点を獲得している。図表6-1-11は、G小学校の教育力実態を示すものであるが、「読解力」向上のための「学校経営基盤の整備・充実」、つまり、学校長のリーダーシップが著しく発展していることがお分かりいただけよう。同様に、図表6-1-12に示したH中学校の場合は、家庭の働きかけの充実ぶりが目をひく。

これらの教育力実態は、先の充実型のものとは比べると、ややバランスを欠いているように思われる。しかしながら、ある種の教育力が傑出してはいるが、それ以外の教育力もそれなりに整っている、少なくとも大きな問題があるわけではない。この点が、後述する、弱点型及び深刻型の教育力との違いである。

図表6-1-11 特長型の教育力パターン(G小学校)



図表6-1-12 特長型の教育力パターン(H中学校)

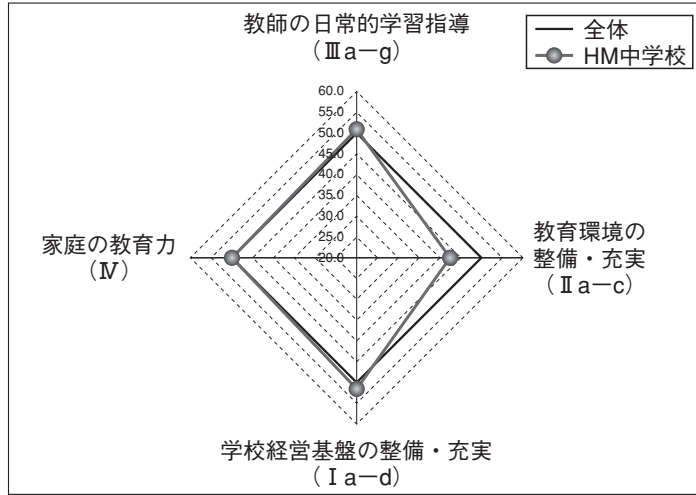


(2) 「読解力」中位の学校に見られる教育力パターン：バランス型と弱点型

「読解力」、そして他の学力とも平均的な得点を得ている児童・生徒が多い学校の教育力は、2タイプを見いだすことができた。

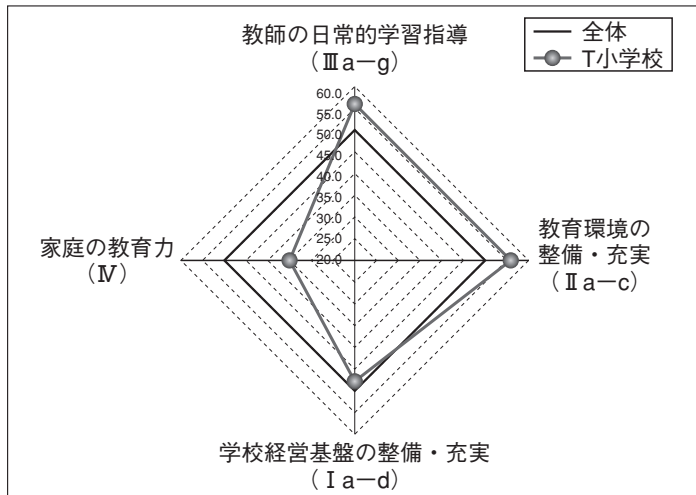
1つは、教育力の4側面がいずれも平均的な数値を示す場合である。バランス型の教育力と呼べよう。図表6-1-13のHM中学校がその代表例であろう。理想型学力と充実型教育力の間にも確認できた、学力と教育力の同型性、換言すれば「バランス」をキーワードとする学力と教育力の関連性は、「読解力」中位の場合においても確認された。

図表6-1-13 バランス型の教育力パターン(HM中学校)



もう1つは、教育力のある側面だけが、平均値を大きく下回っている場合である。例えば、図表6-1-14のT小学校の教育力実態がその代表的存在である。このケースでは、教師の日常的学習指導、教育環境の整備・充実、学校経営基盤の整備・充実が平均的な数値、あるいはそれよりも若干高い数値を有しているのに、家庭の教育力は、著しく劣っており(偏差値で35.1)、問題視される。こうした教育力パターンを弱点型と呼ぶこととする。

図表6-1-14 弱点型の教育力パターン(T小学校)



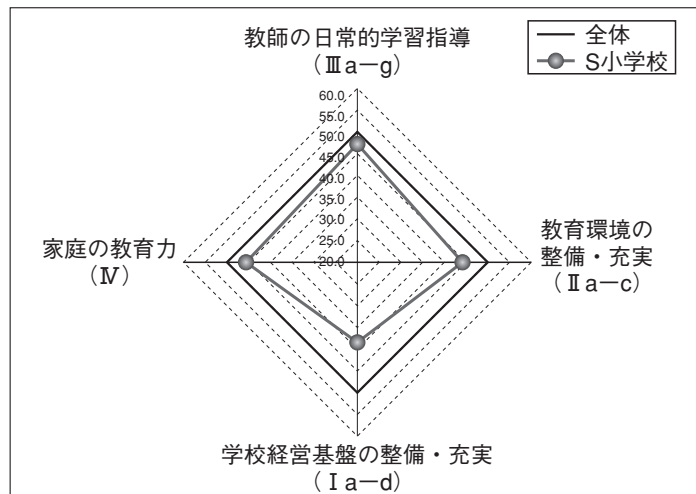
この弱点型教育力の存在は解釈が難しいが、「読解力」向上に向けた指導等に多少問題があっても、ある程度までにそれがとどまるならば、その他の教育力によってカバーできると考えるのが妥当であろう。

(3) 「読解力」低位の学校に見られる教育力パターン：停滞型と深刻型

「読解力」低位の学校の教育力パターンにも、レパートリーがある。それらは、停滞型と深刻型と呼べる類のものである。

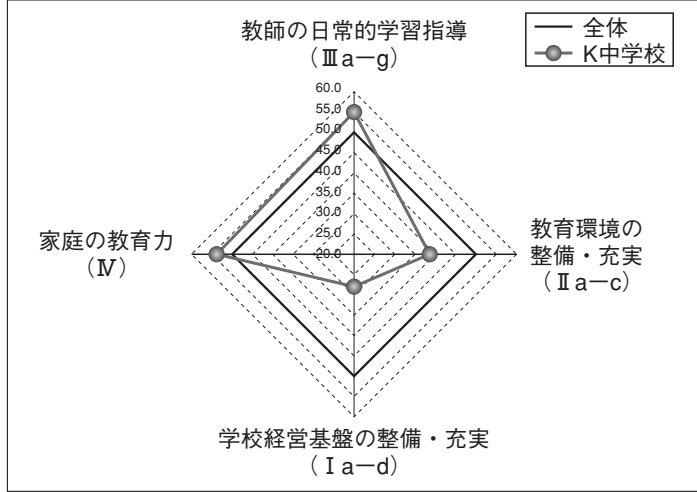
まず、停滞型であるが、**図表6-1-15**のS小学校の場合が典型的である。教育力の4側面の偏差値を確認してみると、教師の日常的指導が46.1、教育環境の整備・充実が44.0、学校経営基盤の整備・充実が38.4、家庭の教育力が44.9という結果であった。いずれも平均値を下回っており、教育力のレーダーチャートは、小さな四角形を描いている。

図表6-1-15 停滞型の教育力パターン(S小学校)



深刻型は、先に述べた弱点型の問題点が強調される場合である。つまり、レーダーチャートのひずみがさらに大きくなっている場合だ。例えば、**図表6-1-16**は、K中学校の教育力実態を示すものであるが、学校経営基盤の整備・充実に関する得点が、極めて低い。教師の日常的指導や家庭の教育力の得点が平均を超えていることと対照的である。教育力の弱点は、それがあまりにも大きくなると、「読解力」、それを含む学力全体の育成にとって大きなダメージを与えることになることが分かった。

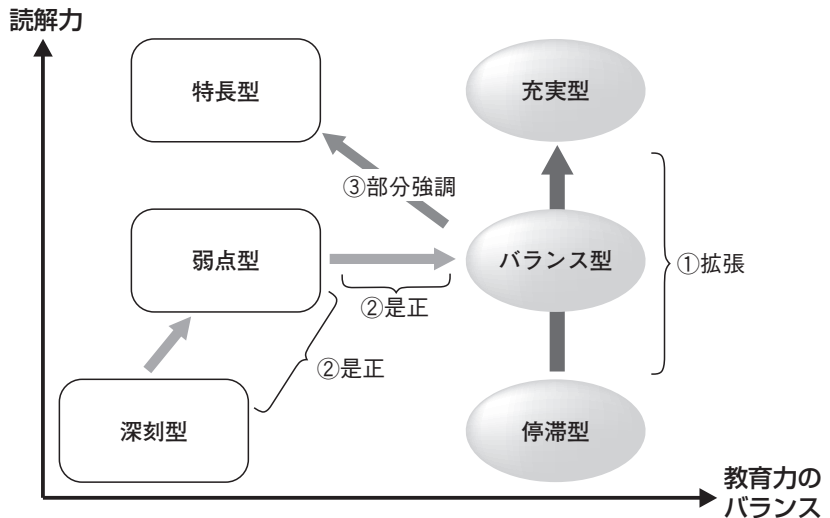
図表6-1-16 深刻型の教育力パターン(K中学校)



3 「読解力」向上に向けた教育力の進展モデル

②の結果を踏まえると、「読解力」の向上に向けた教育力の発展には、いくつかのルートを構想することができよう(図表6-1-17)。それは、大別して、3つの原理に基づくものである。それぞれを解説しよう。

図表6-1-17 「読解力」向上のための教育力の発展モデル



(1) 拡張

ある学校の児童・生徒の「読解力」が低くて、さらに当該校の教育力が、その全体が問題視される停滞型の状態にあったとしよう。それを改善するための基本路線は、教育力の「拡張」である。この発想は、バランス型教育力を充実型のそれへと進展させたいと願う場合にも適用可能である。換言すれば、教育力のレーダーチャートの形を次

第に大きくしていくことを目指すべき場合である。筆者らが定義する「読解力」は、合成学力であり、その指導等には、様々な要素が必要とされよう。その多様性に応えるために、一度に様々な取り組みに着手する方向性が、この「拡張」ルートなのである。

もちろん、「読解力」の向上に関わるすべてのことを関係者(教員、学校長、保護者等)が引き受け、遂行するのは不可能である。したがって、指導等の拡張は、それを組織単位で満たすと考えて然るべきである。

(2) 是正

「深刻型」の教育力実態が確認され、児童・生徒の「読解力」が低位である場合は、どのようにしたらよいだろうか。このタイプの教育力実態は、改善の方針がはっきりしている。言うまでもなく、それは、平均値を大きく下回っている教育力の側面に対して、緊急措置をこうじることである。換言すれば、どのようにして、「弱点型」へと移行するかが、課題となる。

先に、図表6-1-16に示した、K中学校であれば、学校経営基盤の整備・充実が特に問題視されたわけであるから、「基本方針の設定と共通理解の促進」「教育資源や教育環境の整備・活用」「教育課程の整備・充実」「校内組織や協力体制の充実・強化」のカテゴリーのいずれか、あるいは、各カテゴリーの項目の中から取り組みやすいものをピックアップし、その改善を図るとよいだろう。例えば、ICT環境をすぐに充実させることは難しいが、朝読書であれば、その実施にそれほど高い壁があるわけではない。保護者に対して、「読解力」向上のために家庭でできる支援を要請することも、他のものに比べれば、取り組みやすいであろう。

さて、もうひとつ、教育力を是正する局面が存在する。弱点型教育力をバランス型に転じようとする場合である。この場合にも、課題は明確である。それは、平均値を下回っている教育力要素の改善を図ることである。例えば、図表6-1-14に掲げたT小学校であれば、家庭の教育力が脆弱であるわけだから、そのパワーアップに努めることになる。ただし、先の深刻型の教育力に比べれば整備されているわけだから、教育力の改善にも、思慮や工夫が必要とされる。T小学校が家庭の教育力の向上に取り組む際には、3つのカテゴリー(しつけ、家庭での交流・支援、学びへの参画)のどれか、あるいは各カテゴリーのいかなる項目が課題となっているのかを十分に点検しなければならないだろう。

(3) 部分強調

バランス型教育力を特長型教育力に高め、それによって、児童・生徒の「読解力」の充実を図るならば、その方針は、学校の特色を見つけ、それを強調する学校改革の道筋をたどることになる。

この場合にも、熟慮が必要だ。教育力調査の結果を(1)(2)以上に緻密に分析することになる。また教育力調査の分析だけでなく、学校の歴史や置かれた条件の検討も教師たちに求められよう。

学校の特色の発見、再確認はそう簡単なことではないだろう。けれども、もし、それがかなうならば、拡張ルートを歩むよりもスピーディーに、また費やすエネルギーを少なくして、「読解力」の向上を実現する可能性が、このルートには潜んでいる。